

A0

中学校の「国語科書写」では、文字を正しく整えて速く書くことをとおして、社会生活に生かすことを学習してきました。

表裏

高等学校の「芸術科書道」では、これをふまえて古典の学習をとおして、いろいろな美しさを味わい、筆、墨、紙などの用具・用材の特性を生かしながら創造的な自己の表現を求めています。

A15

漢字の書とは、漢字を書いた書のこと、仮名などを交えない書をいう。現存する最古の漢字は甲骨文で、

これにはすでに文字としての体系が備わっているといわれている。

その後、時代の進展する中で、

篆書・隸書・草書・行書・楷書といった書体が生まれてきた。

P2

書の芸術性

P2

書は、中国・朝鮮・日本などの漢字文化圏において、文字を書くことから昇華した

造形的視覚芸術である。したがって書は、文字である必要があるが、

文字を書いたものであればすべて書かという、必ずしもそうではない。

文字そのものは、人間の意志を伝達する記号にすぎない。文字を媒体として

さまざまな美の要素が盛り込まれて、はじめて芸術としての書が誕生するのである。

文字の上に表現される美の要素は多種多様であるが、

大きく形象性と精神性の二つに分類することができる。

形象性とは筆画（点画）によって構成される文字の姿のことで、

筆者の美を愛する心と技術の鍛錬によって造形的な美しさが構築される。

精神性とは、筆者の人間性のことで、筆者の生気・個性・創造力などが毛筆をとおして

紙面に表現されるのである。

P3

文字には、筆順があるために、それを書表現上の条件ととらえれば

書には時間性・律動性を伴う美の要素が含まれ、

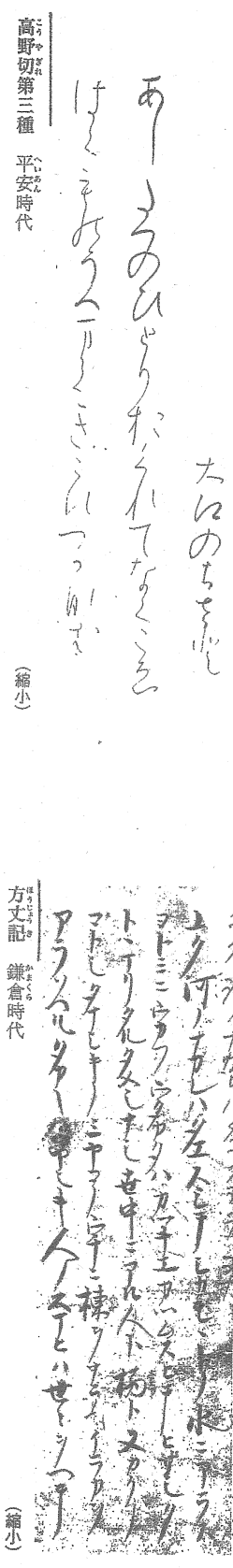
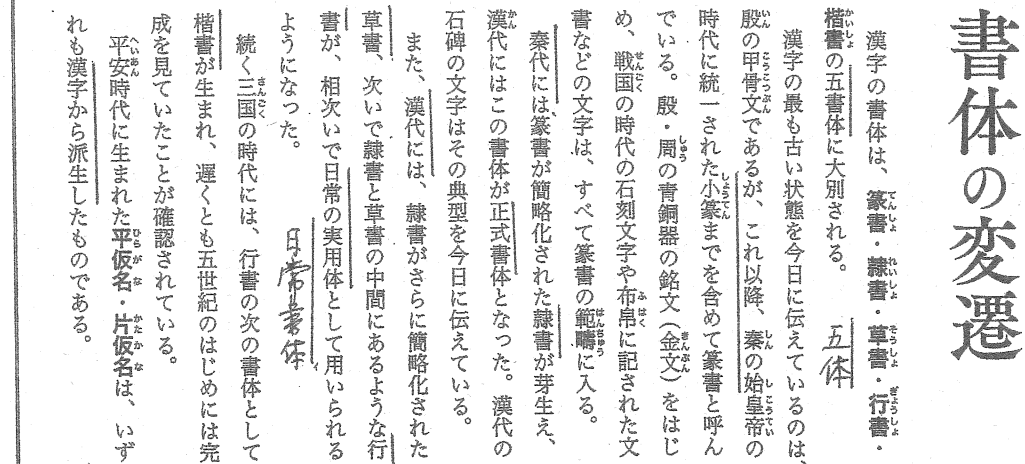
また、毛筆など機能性豊かな用具・用材の開発・工夫により、書表現の幅は

よりいつそう広がることになる。

古来、「書は人なり」「書は心の画なり」といわれるように、

書（特に毛筆で書かれた文字）には書く者の心が端的に表れるといわれる。

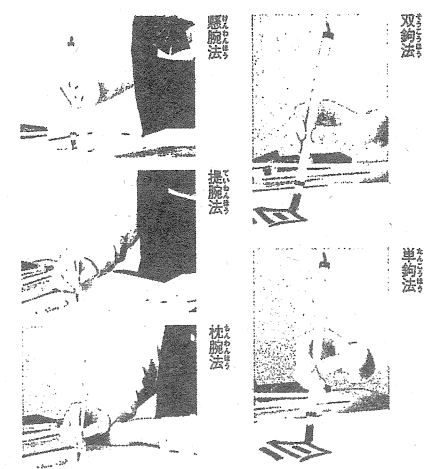
かくして書は、数千年の歴史を背景に、もつとも東洋的な芸術として発展してきたのである。



書道用語集

執筆法 — 筆の持ち方・構え方 —

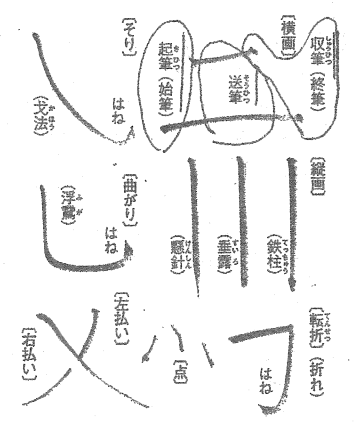
- 1 双鉤法「そうこうほう」筆の軸に人さし指と中指の二本をかける方法。
- 2 単鉤法「たんこうほう」筆の軸に人さし指一本をかける方法。
- 3 懸腕法「けんわんほう」腕を机につけず、宙に浮かして書く方法。大きい文字を書くのに適している。
- 4 提腕法「ていわんほう」腕を軽く机につけて書く方法。
- 5 枕腕法「ちんわんほう」一方の手を枕にし、他方の手首をその上に乗せて書く方法。小さい文字を書くのに適している。



用筆・運筆

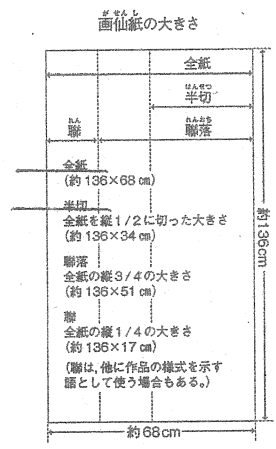
- 6 用筆「ようひつ」起筆・送筆・收筆などの筆の穂先のはたらかせ方。
- 7 運筆「うんぴつ」運速・抑揚・軽重・曲直といった筆の運び方。

- 24 篆書「てんしよ」漢字の五書体の中でもっとも古い書体。隷書に移行する前の書体の総称。
- 25 甲骨文「こうこつぶん」文字としての体系をもつ最古の漢字。亀の甲や牛の骨などに刻された古い記録。
- 26 金文「きんぶん」主として、殷周の時代の青銅器に施された文字。鐘鼎文ともいう。
- 27 大篆「だいてん」秦の小篆より先に整いつつあった書体。戦国時代後期の金文や石鼓文がこれにあたる。
- 28 小篆「しょうてん」秦の始皇帝が制定したとされる篆書の標準的な字体。秦篆ともいう。
- 29 文字の統一「もじのとういつ」紀元前三世紀に秦の始皇帝が天下を統一した際に実施したもので、全国で使用する正式の文字を小篆に統一したとされる。
- 30 隷書「れいしよ」篆書の点画が直線化され、簡略化されて生まれた書体。
- 31 草書「そうしよ」隷書が速書きされ、簡略化されて生まれた書体。
- 32 行書「ぎょうしよ」隷書が速書きされて生まれた書体で、王羲之によって芸術の域に高められた。
- 33 楷書「かいしよ」隷書から派生し、草書・行書の次に生まれた書体。漢字の五書体中もっとも後に完成をみた。
- 34 小楷「しょうかい」小字の楷書のこと。細楷ともいう。
- 35 片仮名「かたかな」楷書や、行書で書かれた万葉仮名の片方（偏・旁・冠など）を用いたものが多いが、一字全体を用いたものや（チ・ニ・ハ・ミなど）、草書体からできたものもある（キ・シ）。
- 36 平仮名「ひらがな」漢字の草書体を用いた草仮名が、より簡略化されてきた書体。
- 37 変体仮名「へんたいがな」平仮名とは異なる形をした仮名のこと。字源を異にしたたり、字源は同じでもくずし方が異なるもの。
- 38 字形「けいけい」文字の形態。



- 8 筆順「ひつみやく」点画から点画へ、文字から文字へと移る際の気持ちのつながり。気脈ともいう。
- 9 蔵鋒「ぞうほう」筆の穂先を中に巻きこむようにして書く方法。
- 10 露鋒「ろほう」筆の穂先をあらわにして書く方法。
- 11 中鋒「ちゅうほう」筆の穂先が線の中心を通るようにして書く方法。
- 12 波磔「はたつ」隷書の横画や右払いに見られる筆法で、大きくうねり、はね上げるように抜いていく書き方。
- 13 一字一波「いちじいっぱ」隷書における波磔を、一字の中で一つの画だけにすること。

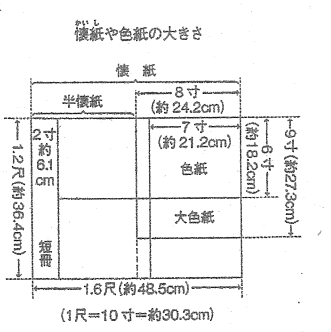
- 14 文房四宝「ぶんぼうしほう」文房（書斎）で使われる用具・用材の中で特に重要な筆・墨・硯・紙の四種。
- 15 紙の規格



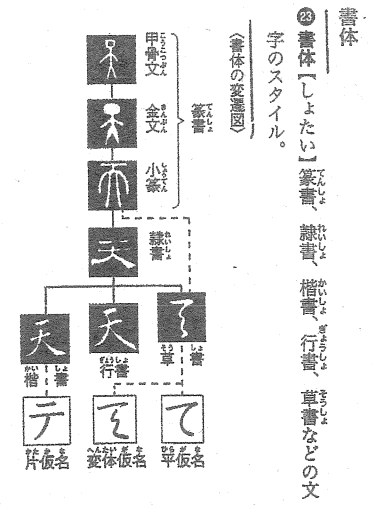
- 39 背勢「はいせい」点画を、互いにそり合った形に書くこと。
- 40 向勢「こうせい」点画を、互いに向き合った形に書くこと。
- 41 方勢「ほうせい」楷書で、鋭く角ばった趣。
- 42 円勢「えんせい」楷書で、おろから丸みをおびた趣。
- 43 書風「しよふう」文字の書きぶりから感じられる趣。
- 44 欧法「おうほう」九成宮醴泉銘に代表される欧陽詢の厳正な楷書法。
- 45 虞法「よくほう」孔子廟堂碑に代表される虞世南の温雅な楷書法。
- 46 褚法「ちよほう」雁塔聖教序に代表される褚遂良の軽快な楷書法。
- 47 顔法「がんぼう」顔氏家廟碑に代表される顔真卿の重厚な楷書法。



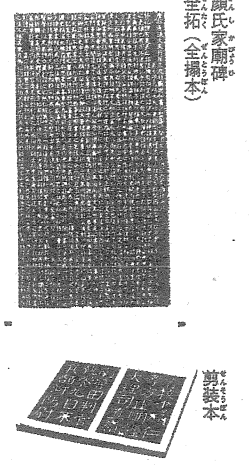
- 48 書写材料および書の種類
- 49 青銅器「せいどうき」青銅（銅と錫の合金）を、鋳型に流し込んで作られた器。
- 50 帛書「はくしよ」帛は絹のこと。これに書いた手紙や文書をいう。
- 51 竹簡「ちつかん」竹の札。紙が発明され流通する以前、これに文字が書かれた。



- 16 書道の学習方法
- 17 臨書「りんしよ」古人の名跡などを手本にして書の表現を学ぶこと。
- 18 形臨「けいりん」文字の造形と筆の動きを忠実にとらえて書く臨書の方法。
- 19 意臨「いりん」文字の特徴的な趣をとらえて書く臨書の方法。
- 20 背臨「はいりん」臨書のあと、手本を見ずに書く方法。
- 21 做書「ほうしよ」臨書のあと、詩文や語句を、臨書によって学んだ特徴や表現技法を生かして書く方法。
- 22 模書「もしよ」敷き写すなどして手本を模写的に書く方法。
- 23 臨模「りんも」模書に同じ。臨書全般をいう場合もある。



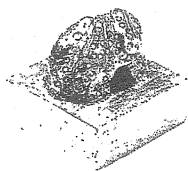
- 24 書体「しよたい」篆書・隷書・楷書・行書・草書などの文字のスタイル。
- 25 書体の変遷図
- 52 木簡「もっかん」木の札。竹簡と同じく、紙が発明され流通する以前、これに文字が書かれた。日本でも紙が希少で高価であった古代、日常の文書に木簡を用いた。
- 53 漢簡「かんかん」漢代に書かれた竹簡や木簡の遺品の総称。
- 54 石碑「せきひ」後世に伝えるため、人の事跡などを記念する文章を石に彫って立てたもの。
- 55 摩崖碑「まがいひ」天然の岩壁や巨石に碑文や詩文などを刻したもの。
- 56 漢碑「かんぴ」漢代に作られた石碑。多くは隷書で書かれている。
- 57 龍門造像記「りゅうもんぞうざうき」龍門石窟（河南省洛陽郊外）にある造像記。主として北魏の時代のものをさす。
- 58 金石「きんせき」金属と石。これに鋳込まれたり、刻されたりした文字や文章を金石文という。
- 59 拓本「たくほん」木や石などに紙をあて、そこに刻された文字を、墨をつけたたばを使つて、写し取ったもの。
- 60 金拓「ぜんたく」石碑などの全体を拓本にとつたもの。全拓本ともいう。
- 61 剪装本「せんそうばん」石碑などの拓本（全拓）を一行ごときに切り取り、文章の順に冊子に装丁したもの。
- 62 尺牘「せきとく」手紙のこと。もとは文字を書きつけるための一尺の長さの木札の意。
- 63 法帖「ほうじょ」字書の手本となるような古人の名跡を石や木に刻して拓本にとり、帖に仕立てたもの。



日本

現存最古の漢字とされる殷代末の甲骨文以来、漢字は書風や書体の変化を遂げ、三国の時代にはすべての書体が成立した。日本では一世紀には漢字が伝来し、五世紀頃にはその音訓を借りて日本語を表記する方法が生み出された。長い年月の間には、さまざまな書が残されてきた。書としての表現には、時代や風土、民族といった要素が大きく関わっている。それぞれの書の表現や鑑賞にあたつては、それらの背景をよく理解することが重要である。

作品中の白ヌキ数字は、本書の掲載ページを示し、□内の数字は、年表の図版を示す。

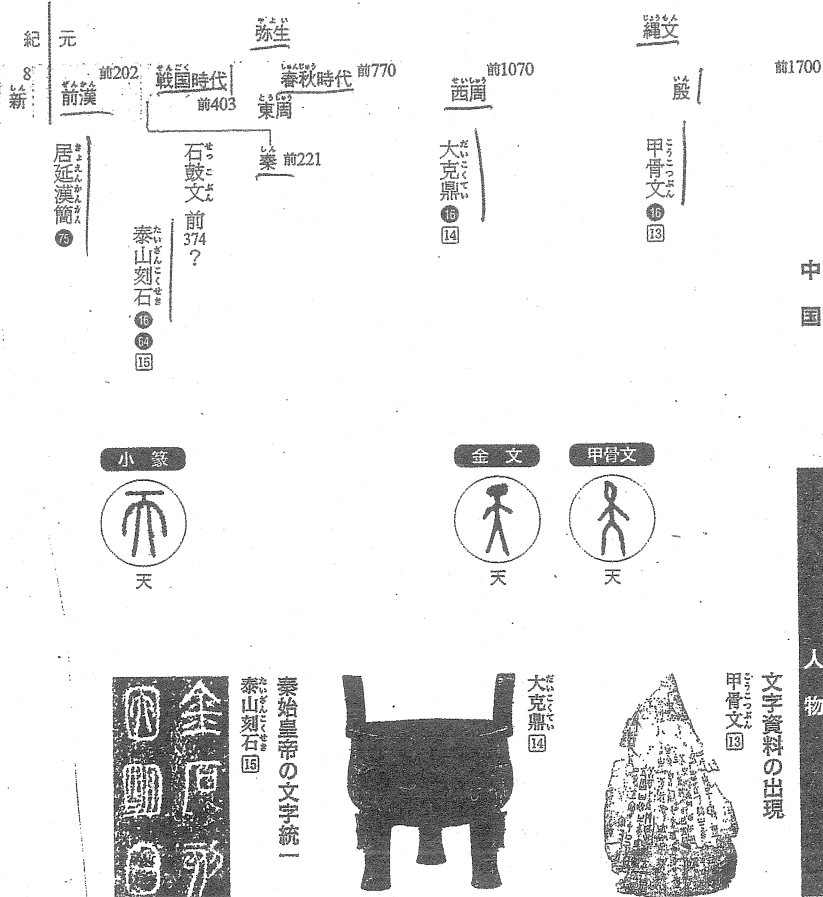


漢字の伝来
漢委奴国王金印

江田船山古墳出土大

江田船山古墳出土大刀銘 ②

漢委奴國王金印
57
88
1



人物

文字資料の出現

甲骨文 13

大克鼎 14

秦始皇帝の文字統一

泰山刻石 15

金剛經

速書きの肉筆文字

居延漢簡《永元器物簿》16

録書の典型

曹全碑 17

賢孝之性根
心收養孝祖

草書・行書の発展

李柏尺牘稿 18

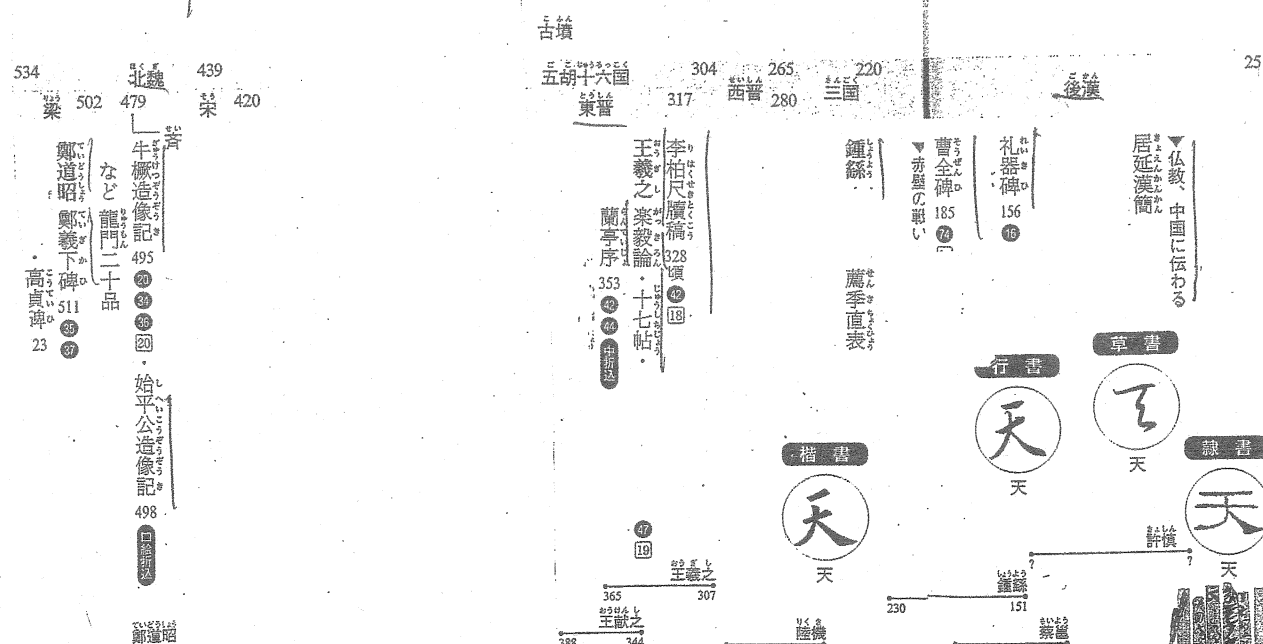
恒不若心今奉臺公

王羲之 平安何如奉橘帖 19

造像記・摩崖
ぎやうけつぼうぞう
牛欄造像記 20

P1423

王兵隸陵亮
鑄石造此弥



江田船山古墳出土大刀銘②

素拙や練習のためと23に

							平仮名	変体仮名	片仮名
							テ	ㄣ	ㄚ
							漢字の草書体とより簡略化	平仮名と異なり形の仮名	漢字の偏や旁を用いたものが多い。これは天の①部。

一年九組 ⑬ 白川太郎

第五回 参考手本 期末考査と連席

書体の変遷 「天」の字 漢字の五体と仮名の三種

P16 P17.

篆書	金文	小篆	隷書	草書	行書	楷書	篆書	金文	小篆	隷書	草書	行書	楷書
殷	西周	秦 篆書	後漢	後漢	東平	唐	天	天	天	天	天	天	天
とつては月物でけすたをす	金属に録止まれな	篆書はたてで丸味・縦長は横長でかたまる	なめらかな連続性あり	↑おろす止める連続性特徴	一点一画とていねい	天の字は必ずしもBの鉤筆です	天の字は必ずしもBの鉤筆です	天の字は必ずしもBの鉤筆です	天の字は必ずしもBの鉤筆です	天の字は必ずしもBの鉤筆です	天の字は必ずしもBの鉤筆です	天の字は必ずしもBの鉤筆です	天の字は必ずしもBの鉤筆です

一年 組 ○ 名

第五回 提出用 期末考査と連席

書体の変遷 「天」の字 漢字の五体と仮名の三種